

A-4. 幼児が自分なりに捉え、生活を作っていく姿 ～野鳥とのかかわりから～ 北海道教育大学附属旭川幼稚園（北海道旭川市） 〈4歳児 6月～8月〉

『自分なりの見方や捉え方ができる幼児をめざして』～身近な自然とのかかわりをとおして～

本園では、周囲の様々な環境とのかかわり、遊びを通して自分なりの生活を創り出していける幼児の育成を目指している。

幼児が心を動かされる環境と出会い、自分から働きかけていく様態を、本園では、『自分なりに』という言葉で表している。それは、自己の気づきやかかわりといった個人的学習だけでなく、他者とのかかわりで自己の学びを陶冶させていくという社会的な学習につながる大切な要素が包含されている。

本研究では、様々な自然環境において幼児が主体的な遊びをする中で心を揺さぶられるような出会いをし、自分なりのかかわりを繰り返し行い、自分なりのものの感じ方や捉え方ができる力をはぐくんでいきたいと考えた。

事例

幼児が自分なりに捉え、生活を作っていく姿

環境構成の手立てと実際 4歳児

～野鳥とのかかわりから～

1. 幼稚園の大木に備え付けられている1台の小さな木箱から、虫を口にくわえた鳥が入り出しているのを数名の幼児が発見した。(6月上旬)
幼児：「大変だ！いいもの見つけた！」
幼児：「赤ちゃんの声が聞こえるよ」
2. 友達に報告し、みんなで見に行った。しかし、幼児が木の下まで行くと、親鳥は警戒して木箱に近寄ってこない。(6月上旬)
幼児：「大丈夫だよ。僕達静かにしてるから」
幼児：「何か、虫みたいのをもってるよ」
幼児たち、「しーっ」と口々に言いながら巣箱を見ている。



3. 「よく見える場所はないかな？」と探し、正面の汽車の滑り台に登り始める。高さは十分のようだが、木箱からは少し距離があり、鳥の様子はよく見えない。(6月上旬)
幼児：「先生、僕(鳥の)赤ちゃん見たいよ」
教師：「どうしたらもっとよく見えるか、考えてみようか」
課題： 簡単には手にできない自然界のルールを伝えつつ幼児の興味に沿っていき手立ては何か
改善： 巣の状態を幼児に見せ、まずは視覚的に納得させる
結果： 同種の鳥ではないが、成長過程を見せた。

(6月11日)



4. 幼児が諦めかけていた時、『ムクドリ』の成長過程の様子を記録した写真を見せる。初めての野鳥の巣を目にした幼児は、再び「どうしても見たい」と方法を考える。勇んで木箱に近付くと、親鳥から餌をねだる赤ちゃん鳥のくちばしが見えた。肉眼で赤ちゃんを見たことで、幼児の想像が現実になった。

幼児：「口開けてたよ！」

幼児：「黄色くて、かわいかったわ」

教師：「かわいい赤ちゃんに会いたいね」

課題： 幼児が扱いやすい道具を使って実現できる方法は何か

改善： 保育室で道具を探しながら、幼児のアイデアや思いを引き出し、今後の対応を考えた。

結果： 双眼鏡を見つけた。

(6月13日)

5. 保育室で普段使っていたおもちゃの双眼鏡を発見する。先を待てないといった様子で双眼鏡に群がる幼児たち。
幼児：「あら？何だかよく見えないわ。難しいわ、これ」
幼児：「僕も難しい」

課題： 玩具の双眼鏡ではよく見えない

改善： 本物の双眼鏡を渡す

結果： 精度はよいが、幼児の力では手元がぶれてしまい、焦点が定まらない。

(6月13日)

6. 「ちゃんと見える展望台を作りたい」という願いから展望台作りに発展する。使うものを考え、幼児と共に物置に材料探しに出掛け挑戦した。

幼児：「先生、これいいわ。この棒長くてよく見えそう」

教師：「どうやって使うの？」

幼児：「立てればいいよ。頭ごっちゃんしないように気を付けて立てるの」

教師：「双眼鏡はどこにつけるの？」

幼児：「あれ、上に付ければいいよ。」

幼児：「先生、ガムテープもってきて！」

課題： 長い棒と双眼鏡の組み合わせで、どのような展望台を作っていくのか。また、同じ場に居合わせた複数の幼児の展望台のイメージは、どのように共有されるか。

改善： 幼児の考えを聞き入れながらも、教師側も積極的に提案をしてき、実現できることに重点を置いた。

結果： 手元が固定されると、巣箱の状況がよく見えるようになり、集中してレンズを覗く姿が見られた。

(6月17日)

7. 双眼鏡の固定化で、巣箱の様子をしっかりと見るができるようになった。雛にせっせとえさを運ぶ様子を見て色々な感じとりをしていたようだ。自分たちも子育てに参加できないかと巣箱の下に虫を置く。

幼児：「あっ、今たぶんお母さん来たよ。これくらい(手で大きさを表しながら)ちいちゃかったもん」

幼児：「何を食べてるんだろうね」

幼児：「僕知ってるよ。虫なんだよ。小さい虫だよ」

幼児：「お母さんとお父さん、頑張っておはんあげてるね」

幼児：「羽根疲れるだろうね」

教師：「それでもあかちゃんのために頑張ってるんだね。みんなのお父さんお母さんと同じだね」

幼児：「何か虫あげようか僕たちも手伝ってあげようよ」

幼児：「でもお父さんとかお母さんが取ってきた虫しか食べないんだよ」

二ワトリの庭からミミズを掘り出してきて巣箱の前に立ち、差し出す。

幼児：「ことりさん、おいで！おいしいよ！」

課題： 人間の手から直接食べることはないという野鳥の習性に気づき、互いに心地よい共存の道を考える土台の経験にしたい。同時に鳥の子育てを通し、自分たちも親に愛されているかけがえのない存在であることを感じ取ってほしい。

改善： 野鳥の食べるものや習慣など簡単な生態について知り、野鳥に近づくための手段とする。

結果： 図鑑や絵本などを幼児の身近に置く。図鑑で生態を知ると同時に、絵本や紙芝居、教師の話などで情動的に伝えていった。

8. 巣箱から姿を見せる頻度が多くなった赤ちゃん鳥であったが、急に姿をみせなくなった。餌をせっせと運んでいた親鳥の姿も全く見られない。とうとうやってきた巣立ちの時期。思いもよらない急な展開であった。

幼児：「先生、赤ちゃんの声がしなくなったよ」

幼児：「お父さんとお母さんも来ないよ」

幼児：「引越ししちゃったのかなあ」

幼児：「きっと巣立ちしたんだね」

幼児：「もうお母さんと一緒に暮らさないことだよね」

幼児：「寂しいね」

教師：「お父さんとお母さんと一緒に暮らせたらいいのね」

課題： 鳥の巣立ちを幼児の立場でどのように受け止めていくのか、少し時間を置いて心の変化の様子を見てみる。

(6月26日)



9. 「巣箱の中を見てみたい」という要望があり、検討した結果、木から取り外して覗いてみた。中には、糞や木の実、綿のようなものが腐敗した状態で積み重なっており、ウジ虫も湧いていた。かわいい小鳥からは想像もつかない現実、ショックを受ける。

幼児たち「うわ・なんだこりゃ!」「きったねー!」

幼児：「かわいそう。こんなところに住んでたんだね」

幼児：「お掃除してあげればよかったね」

教師：「こんなに汚いおうちに、また来年も子育てしに来てくれるかなあ」

幼児：「きっと来ないよ。もしかしたらいなくなっちゃたのも、汚いからおうちがいやになったのかもよ」

幼児：「新しいおうち、作ってあげたいな」

幼児たち「そうだね!」

課題： より快適な家作りのために必要なものを幼児たちに考えさせ、具現化を図る。

改善： 幼児が考える範囲の素材は空き箱やダンボールなどで、中には布団やプールを用意するといった発想もあった。自分たちが楽しい空間と野鳥にとって快適な空間には、大きな違いがあった。

結果： 具現化ができる案とできない案に分け、とりあえずお菓子の箱で作りテラスに置くが、翌日に雨が降って壊れてしまう。(8月下旬)

その後の活動

鳥小屋の組み立てキットを用意し、幼児に提案してみる。2グループに分かれて作り、「木箱にかわいい色を塗ってあげたい」と、3日間にわたって色塗をする。最後に階段も作ってつけ、満足感に浸る。(10月初旬)

考察より

教師が幼児の思いを汲んで活動を促す場面では、取り組み始めるまでの役割の争奪、順序を待つなどの決まりを作るといった姿が多く見られた。自分の思いだけでなく、友達と一緒に一つの活動に取り組む際の葛藤を経験した。

また、失敗から得たヒントを次の活動につなぐかわりも見られた。自分たちの考えを具現化するための手順に気づいたり考えたりする力が養われた。今回は、幼稚園に飛来して来る野鳥とのかかわりから、ほとんどの幼児が親しみの気持ちや相手を思いやる気持ちなどを表現するようになった。

今後の方向性より

4歳児の一時的な興味に任せて野鳥の生活を侵すことがないように考えたため、野生に生きる身と自分たちとの違いを幼児なりに考えさせ、距離を保ってかかわってきた。来春、再び子育てをしに帰ってくることを待ちながら、冬の時期にやってくる野鳥やその他の生き物とのかかわりを進めていきたい。小さな生き物を大切に思う気持ちは、いずれ自分や友達を大切に思う気持ちにつながっていくであろう。そのため、幼児の気づきやその時々思いを確認しながら、継続的にかかわりをつなげていこうと考えている。

ポイント

鳥の赤ちゃんが見たい!という子どもの想いを汲み取りながら、自然界のルールを守りつつ、保育者が子どもの願いに寄り添っているのが分かります。子どもたちが「自分なりに」、野鳥との付き合い方を考え、かかわりを調節しながら、展望台作り・鳥小屋作りへと発展させ、鳥への関心を深めています。